

ディレクトフォースについて

まず、国際機関を目指す諸君にというテーマで前国際エネルギー機関（IEA）事務局長、現在公益財団法人笹川平和財団理事長を務める田中伸男さんの講演を受けた。

IEA は世界市場に出回る石油量の調整を主に行う機関で石油危機の時に発足した。今の課題は、低石油価格シナリオを作ることだ。現在、世界の石油のほとんどは、中東（OPEC）から採掘されている。OPEC は、生産量を故意的に少なくし、高価格での石油の販売を目指しているため、IEA は OPEC と協力し、中東の不安定性を取り除き、石油市場を安定させることを試みている。

また、温暖化の進む地球の平均気温を 2 度低下させるには、再生可能エネルギーをどれだけ安く作り、稼働させるかが課題となる。今まではこれからも、石油の時代は続いていくと考えられていた。しかし、2 度低下させることになると、石油の消費が減少し石油の時代が終わるかもしれないという考えが生まれた。

現在ヨーロッパでは、集団的エネルギーを導入しており、電力のシェアを行い、安全保障と持続可能性実現を目指している。しかし、不可能だと言われてきた島国である日本でも、「Asia super grid」というアジア全体で電気をシェアするという計画によって、可能になるかもしれない。そのときに、原子力発電が大きな役割をもつ。今後、中国での需要が増えると予想されており、事故が起こった時日本にも影響があるかもしれないと考えられている。

2011 年に起こった福島第一原発での事故は人災であったと考えているようだ。第一原発が古く、防波堤のない海沿いに位置していたこと、全ての原因は準備不足だったことにある。そして、今後の課題として新しい原子力発電を実用化することがあげられる。新しい原子力発電を安全に実用するためには、世界一厳しい安全基準を作る、少しずつ稼働させていき、安全性を確かめる、などの計画がされている。これからは、日本だけではなく、世界のために国際機関を利用していく必要がある。

私はこの講演を受け、世界は思っていたよりもグローバル化が進んでいて国際機関が大きな役割を持っているのだということを強く実感した。教科書でもグローバル化というワードは、何度も登場していたが、実際にどのような場面でその動きが進んでいるのかはなかなか実感が湧かなかった。しかし、お話を伺い、世界はどんどん自国を中心に考える個人主義的な考えから、お互いに協力し合う集団主義的な考えに変化しているのだと感じた。世界が様々な国際機関によって繋がり、本当の意味で世界が 1 つになる日も近いのではないかと思った。その為にも、お互いの国が他国の文化を受け入れる大きな心を持ち、協力していくことが本当に大切なことなのだと思う。

また、原子力を日本でこれからも続けていくというようなお話があったが私はこの考えには反対する。福島第一原発での事故は、誰もこのような被害を予測できなかったことが原因だと散々報道されてきた。それなら、今後どんなに厳しい基準を満たしていたとしても、また予測出来ない事故が起こる可能性はあると思う。災害の多い日本でこれからも原子力発電を続けていくことはリスクが大きいと私は思った。この講演では、日本や世界の未来を考える良いきっかけとなった。

次にグループごとでのディスカッションが行われた。

最初のターンはキューピーの技術管理を14年間、キューピーハーフの技術、商品管理を行う守屋さんだ。水産大学生時代、近所にあったまだ従業員も少なく小企業だったキューピー工場でアルバイトをし、工場長の勧めでそのまま就職をしたのが食品開発のきっかけだったそうだ。その後、中国へ進出し16箇所の支店を建設した。中国と日本の最大違いは、私も予想していた通り、社会の治安と平等さだった。日本では全ての人が自由に活動する権利が当たり前認められている。しかし、中国では賄賂政治が行われ、戸籍や経済力の格差があり、全ての人が何でも出来るわけではない。そんな中国での食品開発で苦労したことは、文化や常識の違いに何をしても良いか分からなくなってしまったことだ。その時、沢山の挑戦と沢山の失敗があった。しかしその度、失敗から逃げるのではなく原因を考えてみる。そのことで、解決策が見つかり成長へと結びつくかもしれない。また、誰からも信頼を置けるような人間になることが社会で働く上で最も大切なことだと教えて下さった。

次のターンは、笹川平和財団で日中間の安全保障、歴史、交流プロジェクトを担当する小林さんだ。大学の社会科学部では、政治、法律、経済などを学び、中国への留学をきっかけに当時アルバイトで日中交流を行い、そのまま続けることになったそうだ。現在は、世界各地に友人を作る、日本を世界に知ってもらうことをモットーに会議や取材を行っている。海外に留学などで行く時には、出来るだけ外国の人とコミュニケーションをとり、友達を作るのが良いそうだ。また、外国の人と交流していると、時に考えていることが一致しないことも多くある。そのような時は、聞き出し、考え、提案する、コミュニケーション能力が大切になってくる。また、日本人が中国にあまりプラスのイメージを持っていないことが多いように、きちんと相手を捉えないと日本にマイナスのイメージを持たれてしまう。相手の言っていることの全てではなく、その内面を掘り起こし要望には200パーセントで答えることを意識しているそうだ。

3つ目のターンは、元ブリジストン常務、スタッドレスタイヤの名付け親、欧州本社のCAOを務める藤村さんだ。ブリジストンは創立当初から輸出を目指して、ゴムの足袋を製造する会社だった。そこからゴム製造の技術を利用し、国産タイヤの製造へと変化させていった。現在、ブリジストンの売上げの8割が海外で、従業員も9割が外国人という、グローバル化の最先端を行っている。このようなグローバル化の進んだ産業では、個性、論理思考、即戦力を持つことが大事なのだそうだ。周りと同じことをするのではなく、自分にしかない個性、思考を持ち、自己主張していくことが今の日本人には求められている。論理思考を身に付けるためには、プレゼンテーションの練習をする、日頃から「なぜ？」を見つけ自分で考える、知らない人と会話をすることで訓練になるそうだ。日本人は、外国人と比べて真面目で一生懸命だからこそ、縁の下での力持ちとして出世せずに言い方が悪いが会社に使われてしまうのだそうだ。出る杭は打たれるのを恐れるのではなく、そのぐらいの気持ちが日本人には必要なのだと思った。

最後のターンは、今年から日本財団に入職し災害支援などのボランティア活動にも関わる信氏さんだ。具体的な日本財団の活動は、①社会貢献活動を行う企業に助成金を出す②平和的な自主事業を行うことだ。ボランティア活動を始めたきっかけは、当時高校2年生の3月に起こった、東日本大震災で、ボランティア活動に興味があったが受験が控えていたこともあり、何も出来なかったため、大学ではしっかりやりたいと思ったからだそう。最近の熊本地震では、約3週間現地で支援活動をし、崩れた住居から写真や金銭を取り出す、崩れたブロック塀を壊してまとめるなどの作業にあたった。災害支援は、あく

まで自己満足な活動であってそれで相手に迷惑、思い違いにならないように、何をして欲しいのか聞き出すことが大事なのだそうだ。

今回、様々な分野で活躍する方々のお話を直接伺うことが出来て、自分の将来を考えていく上で本当に勉強になった。4人の方はそれぞれ全く違う生き方や考え方をされていて、興味を持って楽しくディスカッションすることが出来た。これだけでもこの研修に参加し、有意義な時間を過ごすことが出来たと心から思った。